

桂川筋河川災害復旧等関連緊急事業関係文化財調査報告

荷原岩切堀川

福岡県文化財調査報告書 第277集

2021

九州歴史資料館

序

本書は、桂川筋河川災害復旧等関連緊急事業に伴い実施した、朝倉市域に所在する岩切堀川の調査報告書です。

平成29年7月に発生した九州北部豪雨は朝倉市及び東峰村を中心として各地に甚大な被害を及ぼしました。30名を超える死者や行方不明者を出す人的被害のほか、多くの家屋の全半壊や床上浸水など、自然災害の脅威を目の当たりにさせられました。

本事業は九州北部豪雨により被災した荷原川の改修に伴うもので、早期の事業着手が望まれていました。

今回の調査では、岩切堀川の調査を実施しました。岩切堀川は人工的に開削された河川ですが、改修工事で本来の姿が大きく改変される事から、現況測量を主とした調査を実施することとなりました。

大規模な災害はいつ、どこで発生するかわかりません。人だけではなく、長い歴史を刻んだ文化財もまた被害により滅失の危険にさらされています。国民共有の財産である文化財を守り伝えるため、引き続き調査研究を進めてまいります。

本書が教育、研究、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。なお、本調査に際してご協力・御助言いただいた関係各位に深く感謝いたします。

令和3年3月31日

九州歴史資料館

館長 吉田法稔

例 言

1. 本書は、令和元年度に桂川筋河川災害復旧等関連緊急事業に伴い、九州歴史資料館が実施した荷原岩切堀川（いないばるいわきりほりかわ）の調査記録である。
2. 現場作業および整理作業、報告書作成は福岡県朝倉県土整備事務所災害事業センターの執行委任を受けて九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は、九州歴史資料館文化財調査室の森井啓次および委託を受けた（株）島田組が行った。
4. 本書に掲載した遺構図は測量業務を受託した（株）島田組による。
使用機材 GNSS 測量機 ニコン・トリンプル Trimble R8-Model3
4 級基準点測量機 ソキア FX
5. 遺構図面や写真等の記録類は九州歴史資料館において保管している。
6. 本書の執筆および編集は森井が行った。

本文目次

1. はじめに	1
2. 遺跡の位置と環境	2
(1) 調査地の地理的環境	2
(2) 調査地周辺の遺跡	2
3. 調査の内容	5
(1) 調査の経緯	5
(2) 調査の概要	5
(3) 横穴群について	7
4. おわりに	8

図版目次

図版 1	1 岩切堀川上流（掘割の開始地点）
	2 堰（下流から）
	3 堰の取水口（上流から）
図版 2	1 岩切堀川下流域
	2 木の宮池へと伸びる用水路（きらく荘付近）
	3 木の宮池（南から）

1 はじめに

平成29年7月5日から6日にかけて、対馬海峡付近に停滞した梅雨前線に向かって暖かく非常に湿った空気が流れ込んだ影響等により、線状降水帯が形成・維持され、同じ場所に猛烈な雨を継続して降らせた事から、九州北部地方で記録的な大雨となった。総降水量が多いところで500ミリを超え、7月の月降水量平年値を超える大雨となったところがあり、福岡県朝倉市や大分県日田市等で24時間降水量の値が当時の観測史上1位の値を更新するなど、これまでの観測記録を更新する大雨となった。これを「平成29年7月九州北部豪雨」と呼び、特に福岡県内では朝倉市及び朝倉郡東峰村を中心とした地域では30名を超える死者や行方不明者を出す人的被害の他、多くの家屋の全半壊や床上浸水など、甚大な被害が発生した。あわせて水道、電気等のライフラインの他、道路や鉄道、地域の基幹産業である農林業にも甚大な被害が生じた。河川の被害は激しく、朝倉市では桂川が氾濫し、水害の猛威を改めて理解させられる事となった。

福岡県では、被災直後から被災地復興のための各種の事業や支援を直接・間接的に継続している。被災動産文化財については甘木歴史資料館や九州歴史資料館に搬入し、現在も保存処理を実施している。埋蔵文化財の取り扱いについても平成29年8月には朝倉市教育委員会と朝倉県土整備事務所との協議を始め、9月1日に開所された災害事業センターとも引き続き協議を実施し、復興事業との調整を行っている。今回の文化財調査も、災害の復興支援の一環として、失われる文化財を事前に調査し、記録として保存するために行うものである。

調査の組織

発掘作業から整理作業・報告書作成にかかる関係者は以下のとおりである。

	令和元年度	令和2年度
朝倉県土整備事務所		
災害事業センター		
センター長	喜多島礼和	北野 靖
災害事業調整課長	佐々木大介	益田光博
事業調整係長	佐藤八宏	伊藤崇陣広
技術主査	守真武宏	守真武宏
災害河川第二課長	平井賢二	中村弘樹
河川第一係長	浦川安正	
技術主査	古賀弘明	
河川第二係長		大藪 泰
技術主査		古賀弘明
九州歴史資料館		
館長	杉光 誠	吉田法稔

副館長	安永千里	安永千里
総務室長	中村満喜子	伊藤幸子
総務班長	畑山 智	畑山 智
事務主査	林田朋子	古賀知香
主任主事	古賀知香	
主事	具志堅靖知	田中佑弥 具志堅靖知
文化財調査室長	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査室長補佐	伊崎俊秋	伊崎俊秋
文化財調査班長	森井啓次	森井啓次
参事補佐		小川泰樹（整理担当）

調査の実施にあたっては朝倉県土整備事務所災害事業センターの関係者、朝倉市教育委員会の文化財担当である中島圭氏に様々なご協力をいただきました。記して感謝いたします。

2. 遺跡の位置と環境

(1) 調査地の地理的環境

朝倉市は北を三郡山地系の山々によって筑豊地域、南を筑後川によって筑後地域と区切られる。地形的には、筑後川の支流であるいくつかの小河川が山を開削し、所々に谷底盆地を形成させながら、扇状洪積台地（朝倉扇状台地群）を形づくっている。筑後川およびその支流によって開削あるいは沖積された肥沃な低地平野は、古くから多くの集落を形成し、水田として利用され、人々の生活を豊かにしてきた。一方で大雨等により山麓は土石流、河川沿いは氾濫などで度重なる自然災害の猛威を受けてきた場所でもある。

本調査地の荷原（いないばる）川は、城・鬼ヶ城の山々に源を発し、中島田で桂川と合流して筑後川へと注ぐ、総延長 8,865 m の小河川である。水量も決して多くはないが、上ノ原、入地、三寺、乙王丸、石成、善光寺、立出の各地区で用水として使われており、利用度は高く、福岡県が管理する筑後川水系の一級河川である。

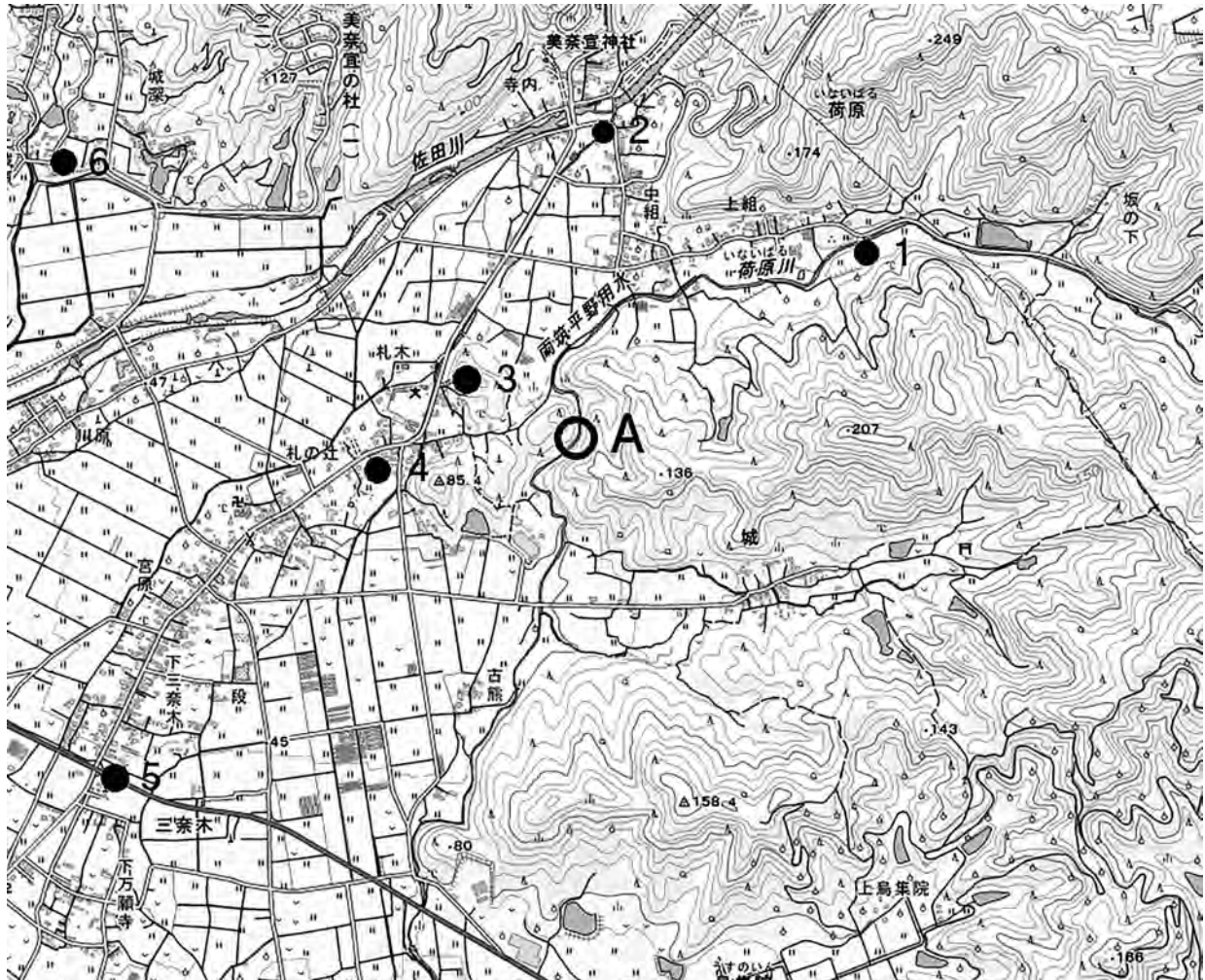
本川の一部は人口的に開削された河川（岩切堀川、地元では「瓢箪堀」と呼ばれている）となっており、本来は清岩寺山の北側を南流していたものを開削したもので、今回の災害復旧に伴い調査を実施した（本報告）。

(2) 調査地周辺の遺跡

調査地周辺では、古代より多くの人々が生活していた痕跡が認められているが、紙面に限りがあるため、本書では調査した岩切堀川に関係する時期である近世以後の状況について簡略に記述する。

近世の三奈木地区および下座郡の大半は福岡藩家老黒田家の知行地である。福岡藩内の大身は藩の確立期に次々と取り潰しを受けたが、三奈木黒田家は逆に加増され、藩の家老としての地位

を保ち続けた。所領の大半が下座郡三奈木村にあったことから、三奈木に別邸を構えたほか、家臣を下座郡内に居住させていた。荷原村は三奈木村の北東に隣接する位置にあり、三奈木黒田家初代の美作一成の知行地であることから、両村は強い関係があり、周辺の村に比しても有力な位置にあったと考えられる。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/20,000) A 荷原岩切堀川

1 荷原地神塔 2 三奈木弥平次が宅跡 3 岩切山城 4 三奈木黒田家庭園 5 三奈木段ノ裏遺跡 6 黒田図書助直之宅跡

福岡藩領で黒田家の知行地であった三奈木には領地経営の中心として黒田家の別邸が置かれ、御茶屋と呼ばれた。黒田本家との混同をさけるため、三奈木黒田家と称し、初代一成から幕末の11代一美まで続いた。幕末まで藩一の家禄を保持し、藩内で唯一万石以上の石高を有する家臣として存在するとともに、代々家督を継ぐと同時に黒田家筆頭家老職に就任した。黒田藩随一の勢力を誇った別邸内には庭園が造られ、園地には水が引かれていた。建築の大部分は明治期に解体され、残された庭園は甘木市教育委員会（当時）において平成12・13年度に発掘調査が行われた後に整備され、公開されている。

三奈木段ノ裏遺跡は国道386号バイパス建設に伴い甘木市教育委員会において平成12年度に発掘調査が実施され、中世から近世にかけての遺構が確認された。近世にかかる遺構としてL字

状に屈曲する溝が検出され、17世紀代の陶磁器類が出土している。遺構の性格は明らかにされていないが、当地域を治めていた三奈木黒田家の家臣が周辺に居住していた事から、その関係性が想起される。

近世以後、筑後川周辺では灌漑や治水目的で様々な土木工事が行われたが、もっとも代表的なものは堀川用水に代表される一連の水利システムである。

寛文3(1663)年におこった大旱魃を機に、筑後川から取水し灌漑のために堀川用水を開削し、新田開発を行う。その後、享保7(1722)年には取水口を現在の位置に移し、岩盤をくりぬいた切貫水門とした。明和元(1764)年には5年の歳月をかけて堀川用水を延長し灌漑面積を拡大。寛政2(1790)年に古賀百工により総石張りの山田堰が完成する。これにより灌漑面積はさらに拡大された。

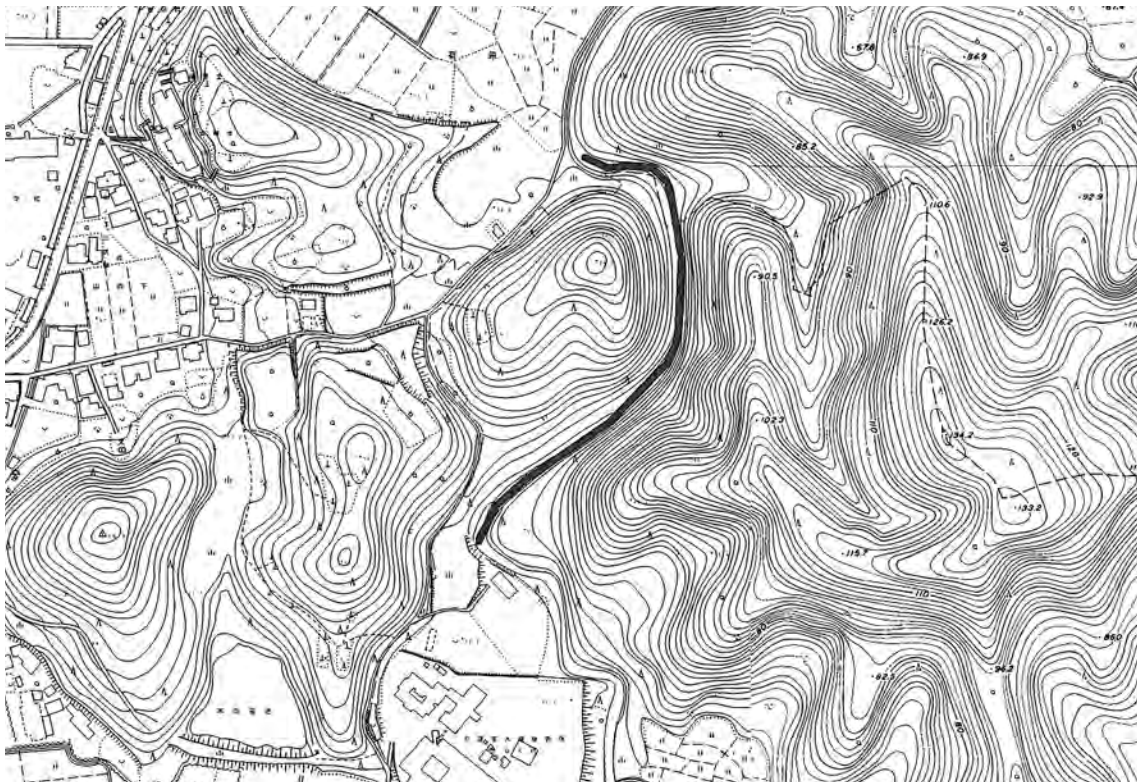
山田堰や堀川は現在にわたって現役で利用されており、昭和56(1981)年には山田堰の大改修を行う。平成2(1990)年には「堀川用水及び朝倉揚水車」が国の史跡に指定され、平成26(2014)年には国際かんがい排水委員会(ICID)が認定する「世界かんがい施設遺産」登録されている。

甘木市史編さん委員会 1981「甘木市史 下巻」

甘木市教育委員会 2003「柿原堂ノ前遺跡 三奈木段ノ裏遺跡」甘木市文化財調査報告書第58集

甘木市教育委員会 2003「旧三奈木黒田家庭園」甘木市文化財調査報告書第60集

福岡県教育委員会 2014「福岡県の中近世城館跡Ⅰ-筑前地域編Ⅰ-」福岡県文化財調査報告書第249集



第2図 調査地周辺地形図(1/5,000) ※中央の太線部が今回の調査対象

3. 調査の内容

(1) 調査の経緯

今回の調査は、平成29年に発生した北部九州豪雨災害の復旧工事に伴うものである。工事に先立ち、朝倉市教育委員会において対象地の確認をしたところ、災害復旧工事に伴い、朝倉市城の荷原川が人工的に改削された、いわゆる「岩切堀川」の形状が変更されることがわかった。

朝倉市教育委員会と福岡県教育委員会、九州歴史資料館の三者で遺跡保存についての協議を行い、本遺跡が地域にとって重要な遺跡である事は認識されていたが、本事業が災害復旧及び今後の災害防止のために行う事業であり、必要不可欠な工事である事から記録保存を行うこととした。

調査の実施にあたっては、朝倉市教育委員会では市が実施する災害事業関連の発掘調査が多数予定されており、早期の実施が困難である事から協議の上、災害事業センターの執行委任を受け、九州歴史資料館が担当することとなった。

(2) 調査の概要

調査は、数回の現地踏査を行った。現地は岩質が脆く、大幅に洗掘されており、堀川開削時の鑿痕など人工的な造作の痕跡はほとんど認められなかった。よって現況の測量調査を主とした記録保存が行うこととした。写真測量は令和2年3月3日～19日に行い、踏査による現地及び周辺の補足調査を実施した後、現地での調査は終了した。

今回の調査では工事対象区間を中心に図化作業を行った(付図1)。国土座標でおおむね $X=46,400$ 、 $Y=-26,100$ から $X=46,100$ 、 $Y=-26,200$ にかかる区間である。断面は比較的洗掘が少なく、掘削当初の形状が比較的良好に保たれていると認められた2か所(A地点 $X=46,150$ 、 $Y=-26,150$ 付近及びC地点 $X=46,300$ 、 $Y=-26,050$ 付近)と堰が設けられているB地点 $X=46,220$ 、 $Y=-26,040$ 付近の3か所で図化を行った。A地点は幅約3.7～8.0m、C地点は幅約3.7～6.0mを図る(付図2)。現状で残りが良い2地点の川底の幅がいずれも約3.7mなので、当初の設計では川幅は二間で計画されていたと考えられる。

工事対象箇所について全線を踏査し観察を行ったが、岩質が脆く、今回の災害以前からも洗掘等を受けていたと考えられ、岩盤が露出している箇所においても鑿痕などの開削時当初の造作痕跡は認められなかった。基本的に素掘りで開削されているが、付近で採集されたと考えられる石



写真1 岩切堀川護岸補修の石垣

材を用いて積まれた石垣が数か所認められ、適宜修復が行われていたとみられる（写真1）。

岩切堀川に明らかな土木構造物として、断面B地点付近に設けられた堰（図版1-2）がある。川を横断する形で作られ、取水口から用水路を通して木の宮池に導水していた取水堰であるが現在は廃止されているようである。現在見えている堰の構造は川底を形成する岩盤から高さ1.7m程度、円礫を積み上げて基礎構造を作りその上にコンクリートを張るが、表面にも石を用いて石張状に見せている。川の左岸側に導水路を設け、水量が少ない時に本線の水が流れるようになっている。現況では堰の東側は高さ52.7m、堰の西側は高さ50mで、約2.7mの高低差がある。この高低差を利用し、高い位置に設けられた幅約1.5m、深さ15～20cmを測る川を横断する水路から川の右岸に設けられた取水口を通して用水路に水を導水する仕組みになっている。今回の災害により被災してコンクリート構造が破壊され流出したが、川の右岸に現在の堰より古い段階の取水口が設けられていた事を確認した。古い段階の取水口は岩盤を彫り込んで作られている。これらの取水口は同時に使用されたものではなく、上のコンクリート張りで堰を作った（修理した？）際には埋め殺されていたようである。

堰から木の宮池へと伸びる用水路は素掘りの溝（図版2-2）だが、人が渡れるように架橋した箇所など、部分的に石垣（写真2）が設けられている。



写真2 用水路に用いられた石垣

なお、遺物については河川という特質上多くの漂流物が認められた。現代のものを主とした新旧雑多なものが流れ着いていたが、「岩切堀川」の造作や機能に伴う遺物は認められず、文化財としての位置づけをすべき資料はなかった。

岩切堀川に隣接して近隣集落の墓地（写真3）が造営されている。墓石や供養塔には明和年間から明治年間の記年銘が認められ、近世中頃から近代にかけて営まれたことが確認できる。朝倉市には国指定史跡の堀川用水や、山田堰など一連の施設として世界かんがい施設遺産に登録された用水施設が存在し、これらの築造は明和年から開始される。新田開発とともにこれらの治水・用水施設の整備が盛んとなる時期である。この墓地に埋葬された集落の人々が岩切堀川と関与していた可能性があり、造作時期もこの時期にある可能性が考えられる。



写真3 近世墓地

(3) 横穴群について

周辺の踏査により、堀川の北側に近接する山の斜面に素掘りの横穴（写真4）を確認した。確実なものが最低3基、埋没しているが可能性があるものを含めると最低5基である。崩落の危険性があるため詳細な計測はしていないが、崩落が少ない箇所では幅約2.3m程度である。機能は特定できていないが、形状や大きさから防空壕と考えられる。当地に近い位置に三奈木地区は太平洋戦争末期に陸軍の秘匿飛行場（陸軍大刀洗東飛行場）が建設された。滑走路は完成したとされるが実際に使用されることなく終戦を迎え（練習機2機が飛来したとの記述が「筑前町史」されている）、間もなく解体されたため現在では痕跡さえも残っていない。また、烏集院と上ノ原には掩体へつながる誘導路の工事も着手されていた（未完成）。東飛行場に関連し、周辺の山麓には横穴式の掩体が発掘されたとの記録があるが、大きさから航空機用の掩体とは考えられない。大刀洗飛行場が存在することから甘木・朝倉地区も度重なる空襲を受け甚大な被害を受けた。本遺構が確実に防空壕であるとの確認はできておらず、「福岡県戦争遺跡調査」においても掲載していないが、戦争に関わる遺跡の可能性が高く、この場を借りて報告する。



写真4 横穴

4. おわりに

岩切堀川の開削目的や時期については文献がなく、今回の現地調査においても明らかにできる遺物や痕跡は認められなかったが、周辺の状況から可能性を提示したい。開削目的については、木の宮池に導水する井堰が存在しており、ある時期から灌漑目的で利用されている事は明らかだが、岩切堀川の開削目的自体が灌漑のためと考える。堰が設けられた箇所は岩盤を削って意識的に2.5m以上の高低差を作り出しており、取水を目的とした造作であることが明らかである。字名が「城」であること、また近接した位置に中世の山城である岩切山城などが存在していることから山城に関係する施設との説もあるが、位置がやや離れることや当該箇所に堀を掘削することによる戦術的なメリットが考え難いことなどからこの説については考え難い。

開削時期についても明らかな碑文や遺物は認められなかったが、古い段階での取水口が岩盤の掘り込みであること、岩切堀川及び用水路が全線にわたり素掘りであることなどから新しい時代のものではなく、近代以前にさかのぼると考えて良いであろう。三奈木村には佐田川が流れ、用水には不足していなかったと考えられるが、近世以後の新田開発に伴い、城村周辺への用水を目的として開削されたと考えられる。荷原川の上流域である荷原村と本来の流路であったと考えられる三奈木村、開削により付け替えられた城村は近世以後いずれも三奈木黒田家初代黒田美作の知行地で、三奈木村には黒田家の別邸が置かれるなど、近隣集落の中でも特に有力な地域であった。

今回の調査は災害復旧に伴い実施した踏査および測量調査を主体とする調査である。筑後川流域は近世以後、灌漑や治水など様々な目的で治水事業をしており、現在も利用されている。河川開発史について、文献以外の歴史的なアプローチは少なく、学術的な観点からの図化等の作業もなされていない。近年は「水中遺跡」について周知の包蔵地を図る向きがあり、文化庁と水中遺跡検討委員会では平成29年に『水中遺跡保護の在り方について』とする報告を刊行した。本例は厳密には「水中遺跡」ではなく、陸上での「遺跡」の範疇と言えるが、水中遺跡の取り扱いが多様化しつつあり、境界線があいまいなものも存在する。ただし、いずれにしても「遺跡」としての取り扱いが必要で、開発行為等が行われる際には、その歴史的、学術的価値を考慮した上で検討が必要である。特に甘木・朝倉地域は山田堰などに代表される水利システムが世界農業遺産に登録され、堀川用水は国史跡に指定されているなど、歴史的、学術的価値が認められている。水利システムだけではなく、歴史的な重要性も含めた様々な観点から河川等についての学術研究が求められるようになるであろう。

1 岩切堀川上流



2 堰（下流から）



3 堰の取水口（上流から）



図版2



1 岩切堀川下流域



2 木の宮池へと伸びる用水路（きらく荘付近）



3 木の宮池（南から）

報告書抄録

ふりがな	いないばるいわきりほりかわ							
書名	荷原岩切堀川							
副書名	桂川筋河川災害復旧等関連緊急事業関係文化財調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 277 集							
編著者名	森井 啓次							
発行機関	九州歴史資料館							
所在地	〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3							
発行年月日	2021 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いないばるいわき りほりかわ 荷原岩切堀川	ふくおかけん あさくらし 福岡県朝倉市 しろ 城	40228		33° 25' 18"	130° 43' 43"	2020.3.3 ～ 2020.3.19	約 2,400m ²	災害復旧
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
河川（人工）	近 世 ～ 現 代		堰 水路		なし		荷原川の付け替えを行った	

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2120261
登録年度	登録番号
2	6

桂川筋河川災害復旧等関連緊急事業関係文化財調査報告

荷原岩切堀川

福岡県文化財調査報告書 第277集

2021年3月31日

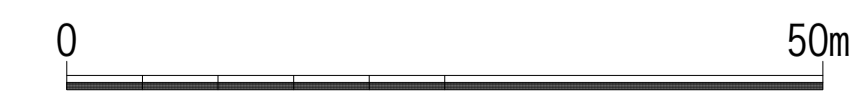
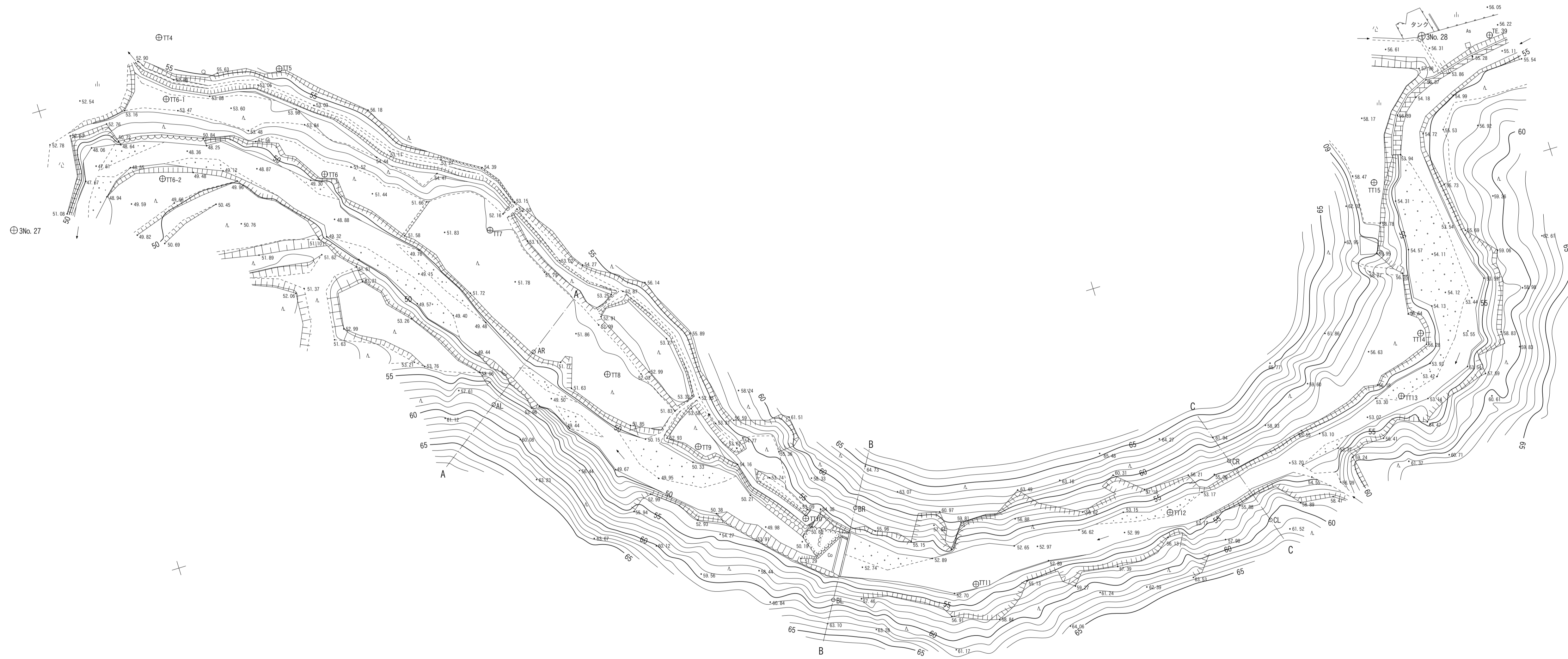
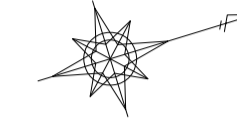
発行 九州歴史資料館

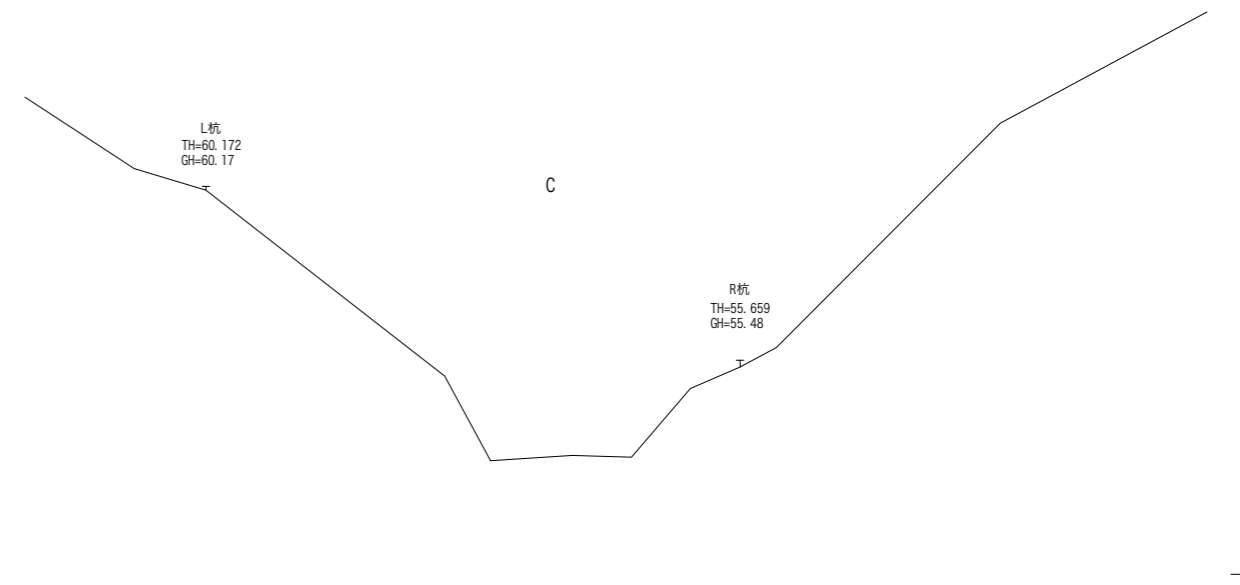
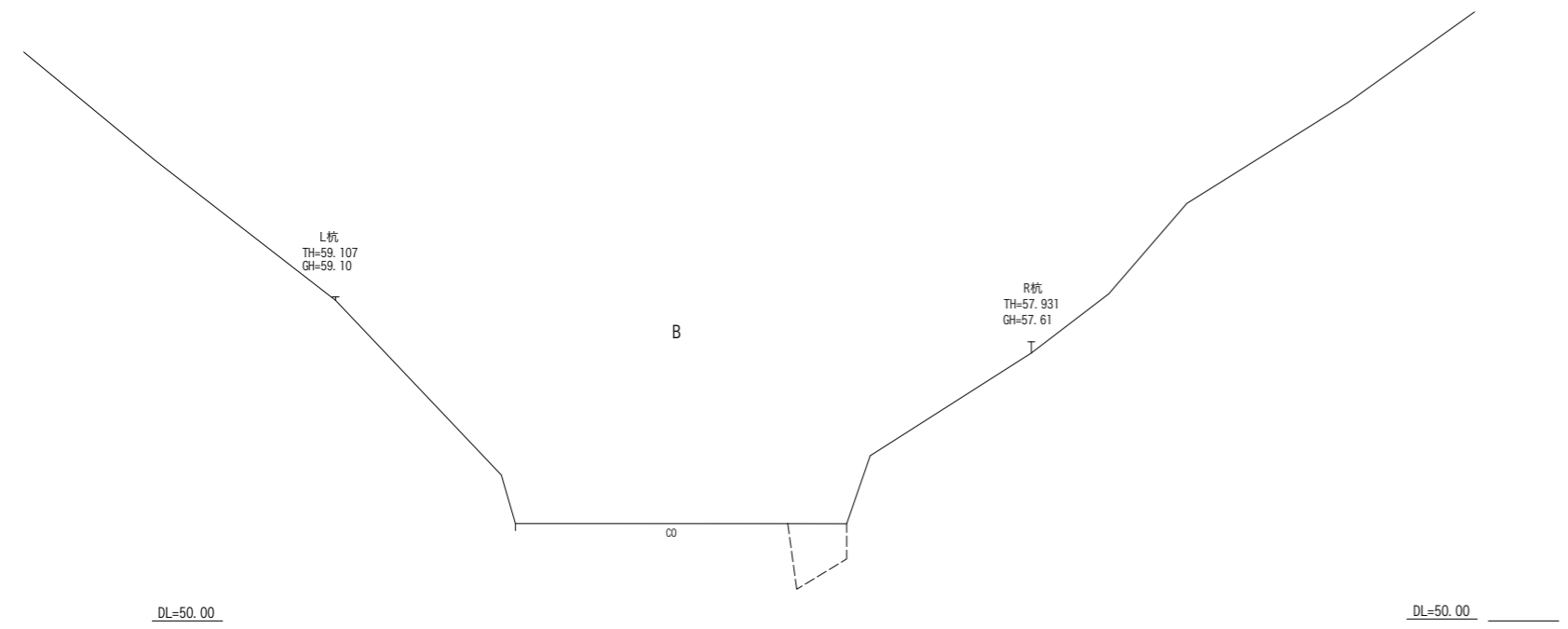
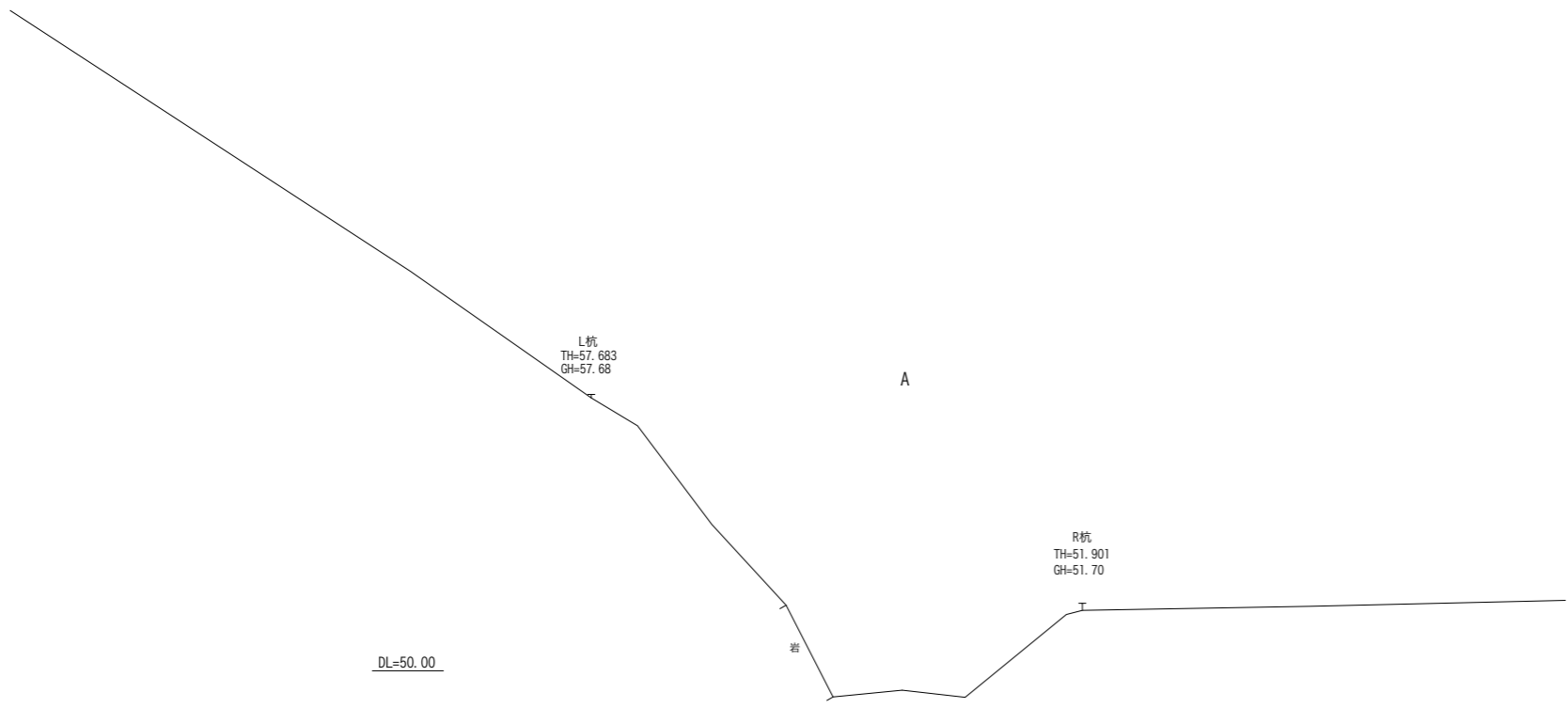
福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷 福岡印刷株式会社

〒812-0892 福岡市博多区東那珂 1-10-15

平面図
S=1:500





付図2 岩切堀川断面図 (S=1/200)